

第十六章 夢浪漫紀行

昭和五十七年頃から何度も海外旅行に出かけている。団体旅行であったり、主催旅行であったり、個人旅行であったり、いろいろである。アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリア、アジアの国々を十数回旅行した。記録に残っている紀行文を掲載する。

アメリカという国（行政ひょうご） 昭和五十九年四月二十日

昨年の九月、私が関西学院大学商学部の助手補をしていた時からの友人で、現在は近畿大学の教授をしている来住元朗先生が、アメリカのサンフランシスコ州立大学へ留学することになった。

そこで、彼の留学の機会に二人でアメリカ西海岸の都市を旅行しようということになり、年末から年始にかけて二週間、アメリカに行った。彼の専門はマーケティング論なので小売業、特にデパート、スーパー、メールオーダーの店の実態を、彼と関学の後輩である岡本輝代志岡

山商大助教授（カリフォルニア大バークレー校に留学中）と三人で見てまわることが出来た。

① 大きくて、豊かで、美しい国

アメリカの印象を一言でいえば、大きくて、豊かで、美しい国だということである。国土は日本の三十五倍、人口は日本の二倍程度である。未利用の土地や資源も多く、全てが大きくて豊かなように思えた。

それも、単に国土が広いだけでなく、公園をはじめ公的施設が充実し、真四角な街並み、広いフリーウェイ（高速道）、どこかいビルには目を見張る。また、街も全体的に美しく、旅行者の行く表通りは非常に美しいと感じた。

西海岸南部のサンディエゴのハイアットホテルに二連泊したが、街全体が絵のように美しく、大きくて、豊かで、美しい国の印象を強くした。

東部では凍死者が出る程寒いという一方、西海岸南部の町では、海水浴やサーフィンを楽しんでいる。時差も東部と西部では四時間もある。これが同じ一つの国であるから、その大きさが理解出来る。

日本はアメリカに追いついたと言うが、アメリカから見れば日本はアジアの小国である。それが証拠に「日本の記事はアメリカの新聞にはほとんど出ない」と滞米在住五十年の経験をもつ加州日本人会の永本博さんから聞いた。

永本さんから、「明治の初め、勝海舟、福沢諭吉、ジョン万次郎らが、咸臨丸で日米修好条約の批准交換のためアメリカに行った際、サンフランシスコで二名の水夫が亡くなっている。この水夫のために加州日系人会でお墓を立てたのでお参りしていただきたい」と言われ、彼らのお墓にお参りした。ツアーではできない体験をした。

また、永本さんには、サンフランシスコとその周辺の観光、視察に随分とお世話になった。サンフランシスコやロスアンゼルスには日本人は多い。

②個人主義の国

アメリカというのは移民の国であるから、白人あり、黒人あり、黄色人種あり、それにそれぞれの混血が入り混じって、まるで人種のデパートのような国である。

それらの人間の一人ひとりが個性を発揮して服装や習慣は全く自由で他人を意識せずに自由に生きている。

他人に迷惑をかけなければ、個人の自由や権利は尊重され、また一方、他人のことには一切干渉しないのがこの国の特徴である。

また、何ごともこちらから要求しなければ与えられないのもこの国の特徴である。この国で、他人の親切行為を期待するのは無理。欲しいものは自分から要求しなければならない。私が、最初に着いたサンフランシスコの空港で、スーツケースを引っ張って難儀していて誰も助けて

くれない。困り果てて空港職員に援助を求めると、しばらく待って、電気自動車で出国手続きを手伝ってくれた。

③ ハンディ・キャップへの理解

アメリカでは老人や身体にハンディ・キャップのある人には極めて深い理解が示される。飛行場やホテル、駅や公共の場所には必ず車いすがあり、堂々とそれを利用している。また空港や汽車の駅では特別のサービスが受けられる。

私は、サンフランシスコの空港では出国に特別の便宜を図ってもらったし、国内の飛行場ではどこでも車いすの手配をしてもらえた。アムトラックという長距離列車（ロスアンジェルズからサンディエゴまで）に乗った時も、待合室から列車の座席まで特別のサービスをしてくれた。

ネバダの砂漠の中にあるフーバーダムへのツアーに一人で参加したが、アメリカ人の夫婦が私のチェアを押してくれた。デイズニールランドでも多くの車いすの人を見かけた。

④ システムの確立している国

アメリカという国は乗物、観光、ホテル等の予約のシステムと支払のシステムがはつきり確立している。私は一人アメリカに行き、行ってから、来住先生と二人でサンフランシスコの旅行社で、飛行機とホテルを予約して旅行した。また、ツアーはそれぞれの街に着いてからイン

フオメーションセンターで情報を集め、バスツアー(市内観光、デイズニールランド)、シーツアー(鯨見物・サンディエゴ)、エア・ツアー(グランド・キャニオン)に行った。

特にグランドキャニオンへのツアーは、小型セスナ機のため、飛行機酔いや危険を警戒して参加者が少なく、私と米人夫婦の計三人の参加であったが大変印象に残った。

予約をするシステムが確立している一方、支払のシステムもはっきりとしている。カードは、アメックス、ダイナース、ビザの順に信用がある。特にアメックスやダイナースはカードを持っていることだけで信用がある。

システムがはっきりしている国であるから、ルールさえ分れば、誰でも簡単に旅行出来る。また、オークランド郊外のスーパードーを見てきたが、ここではメール・オーダー(通信販売)が小売の主流として確立し、カード・システムと相まって今後の小売業の主流となっていく様子が察せられた。

⑤ 人種差別

黒人やアジア系の白人以外の人も空港やホテルでは随分見かけたが、実生活では、はっきりと区別されているようである。即ち、白人以外はブラック(黒人)、チャイニーズ(中国系)、ジャパニーズ(日本人)と、ブロックごとに集まって生活している。これは、白人の住むよい土地は税金が高く自然とそうなるようである。

白人の女がやたらいばっている国であるから、飛行場やホテルの案内も出来るだけ、白人以外の係員を探した方が親切のようである。それとも美人がいばっているのはどの国も同じことかも知れない。英語を話せない奴はバカだと言わんばかりに早口でしゃべっているから。「私は英語が出来ない」と言つて相手にていねいな英語をゆつくりとしゃべってもらうことだ。

⑥ 治安

治安はたしかに悪い。東部にくらべて西部は安全だと言われているが、それでもホテルには、夜になればピストルを持ったガードマンがいるし、ロスアンジェルズではタクシーの運転手でさえ、白昼ピストルを持っている。ピストルは誰でも大体五万円位で買えるのだそうだ。

ラスベガスのMGMという大きなホテルに泊った時は、昼間から常時数人のピストルを持ったガードマンがいるのは驚いた。しかし、飛行場、大ホテル、有名観光地などは大体安全であるし、サンフランシスコのジャパン・センターや、ロスアンジェルスのリトル・トーキョーは極めて安全である。

「自分の身の安全は自分で守る」ことが常識の国であるから危ないところへは寄りつかないことだ。サンフランシスコの市長と市会議員の二人の要人を殺した殺人犯がたった五年の懲役で出所する国だし、飛行機の荷物がなくなれば保険金を支払つて済ますという国だ。殺人も泥棒も放しがいのような感さえる。これは移民の国の特色かも知れない。

⑦ 禁煙

アメリカでは、スモーカーとノースモーカーをはっきりと区別している。飛行機でも、レストランでも、スモーカーはあまりいい席は与えられない。バスも後の四列だけがスモーカー専用である。国をあげてスモーカーを閉め出している。「タバコをすう人悪い人」のようである。

以上、アメリカという国について感じたままを書いてみた。私は、アフタークリスマスに行つたので、オークランド郊外のスーパーでは、大勢の人が一杯の品物を持ってきていた。これはクリスマス色のプレゼントの品物の色や柄、大きさ、サイズの交換をしていた。家々のイルミネーションは美しく、家族でクリスマスを楽しんでいる様子がよく分かった。

アメリカ人は自分の生活をエンジョイしている。それもファミリーを中心に行っている。ファミリー中心で生活をエンジョイする風潮は日本にもやってくるであろう。

私の次なる願いはマイ・ファミリーでアメリカをもう一度旅行することである。今後十年間ぐらい一生懸命仕事をして、きつとこれを実現したい。

海外旅行は、J.Cの時代に友人と一緒に、国際青年会議所台北大会や、香港、韓国など、アジアの国に何回か観光旅行をした。すべて旅行社の手配した主催旅行である。従って、海外に一人で日本を出国し、一人で帰国したのは初めてである。伊丹空港まで、父と子どもが見送

りをしてくれ、アメリカ旅行の無事を祈ってくれた。反対はされなかったが、無鉄砲なことをするものだと、内心は心配していたに違いない。

年末、年初の、事務所の繁忙期に二週間も事務所を開けるのだから準備が大変だった。家内や事務所の職員のおかげである。

旅行の予定もあと二日で終わり、明日はお土産を買って、明後日には帰途に就くという日に、事務所にいる家内に、最後の連絡とねぎらいの電話を入れ、就寝して間もなく、日本から国際電話があった。「西村さん、子どもさんに変わります」と近くの芹生さんから「おじいちゃん」が亡くなったよ」と小学生の長女から、余りの突然にびっくりした。

父は当時、兵庫県信用組合を退職して、地域の春日神社総代や、光明寺の寺総代などを務め、自衛隊・青野ヶ原駐屯地の防衛協会会長をしていた。当日は、駐屯地の新年名刺交歓会で、防衛協会会長の、新年の挨拶をする直前に倒れ、すぐに社病院に運ばれたが、心筋梗塞で急死した。六十九歳であった。

その後が困った。パンナムの格安航空券で旅行しているので、エンドース（裏書きしてもらって他社便を利用すること）できない。電話がかかってきたのは深夜だから、各航空会社に電話もつながらない。一睡もせず、荷物を片づけ、翌日早くから、ホテルのインフォメーションセ

ンターを利用して、各航空会社に電話し、帰りの便を一日早くする交渉をした。

父が急死したので早く日本に帰らなければならぬ。空席はないか。下手な英語での交渉は進まず、途中で電話を切られてしまうことを繰り返した。最後は、日本語のできる職員のいる日本航空がOKしてくれた。格安チケットの往復料金と同じ金額で、片道チケットをカードで購入した。

加州日本人会の永本さんに事情を話して空港まで送っていただき、お土産をいっぱい買って、段ボール箱に詰め、手荷物とした。余りにも簡単な包装で大丈夫かなと思ったが、「日本の航空会社は安心、心配ない」の一言で納得した。

日本に帰った翌日が父の葬儀である。葬儀の準備はすぐ下の妹の神戸夫婦らがよくやってくれた。参葬者には、喪主の長男がアメリカ旅行から帰ってくるまで葬儀を二日延ばしていただいていることが伝わっており、話題にされた。三人の妹夫婦や、叔父叔母、伯父伯母、地区の皆さまには大変お世話になった。こっそりアメリカ旅行する積もりが大勢の皆さまに知れ渡ってしまった。

加州日本人会の永本さんには、元年六月、第一回滝野町・ホリスター姉妹都市親善調印式で、ホリスター市に藤崎町長らと行った帰途、サンフランシスコのホテルでお会いしたし、永本さんが日本に来られた時に六甲山をご案内した。広島出身の方だった。戦前のアメリカ移民のお

話や、戦時中の苦勞話などをお聞きした。

オーストラリア旅行（行政ひょうこ 平成五年八月一日）

五月二十日から五月二十九日まで、オーストラリアを旅行した。今回の旅行の目的は、メルボルンで行われた一九八三年、第八十四回国際ロータリー年次大会に参加することにあつた。

①オーストラリアという国

オージーの愛称をもつオーストラリアは、人口約一七〇〇万人、面積は日本の約二十二倍、季節は日本の逆で、今は晩秋の落葉の候。人口のほとんどが白人で、使用言語は英語が八十二パーセント、以下、中国語、イタリア語、ギリシャ語と続く。原住民であるアボリジニ人は約二十四万人。

誰が最初にオーストラリアを発見したかは、定かではないが、ジェームス・クック船長が、エンディバー号で南洋を航海中、一七七〇年にボタニー湾に上陸した。ついで、一七八八年に英海軍のフィリップ総督が、シドニーのポートジャクソン湾に上陸、七〇〇人余りの囚人からなる流刑植民地をつくつたのがイギリス人の定住の始まり、このときからイギリス入による統治が始まっている。現在では、英連邦の有力メンバーで世界有数の豊かな移民国家となっている。

②メルボルンにて

シドニーに次ぐ第二の都市で、格調ある英国調の建物が、市内の至るところで見られる緑と公園の街である。十九世紀に建てられた当時の上流家庭の家コモハウスや、フィリップ島のペンギンパレードを観光した。ペンギンパレードは三十〜四十センチメートルのフェアリーペンギンが、日没になると巣に戻ろうとして、群れをなして、行進するのが見られる世界で唯一の観光名所。

ここでの夕食の折に、レストランの老社長に、しきりに英語で話かけられたがさっぱり分からない。もう少し英語は理解出来るのだがと思つて、あとで、隣におられた会員で、オールドフルブライト（昔のフルブライト留学生）の日比さんに伺つたところ、「あれは英語の東北弁だよ」と涼しい顔、特にAをアイと発言するのに加え、やたらと省略が多い。特にオージョーイングリッシュは、オーストラリアを通じても、他の英語圏ではダメ、逆に正しい英語や米語は、オーストラリアでは十分通用するし、評価もされているようである。これから英会話の勉強は重要であるものと考えさせられる一コマであつた。

③ブリスベーン、ゴールドコーストにて

北半球では沖繩ぐらいの位置に当たる南半球一の高級リゾート地である。名所中の名所といわれるローンパインコアラ保護区でコアラを抱いて写真を撮り、カランビン野鳥園でロリ

キュート（オームの一種）の餌付けを楽しんだ。シーワールドでの楽しいアシカと鯨のショーや、水上スキーショーを楽しんだ。コアラ、ウォンバット、カンガルー、エミュー等々南半球の動物、鳥類もこんななまともて見ればもう満喫の一語に尽きる。

ゴールドコーストの中心ゴールドサーファーに、私のまち滝野町上滝野から、三年前に家族全員で、オーストラリアの永住権を得られた渋谷泰三先生宅を訪問した。

先生は二十六年間、県立高校（社、小野など）に奏職、この内二年半は英国に留学、ご夫人も元高校教員、私の町に新居を構えておられたが、勤務先を定年まで十年余りを残して退職、家も売り払われ、オーストラリアへ一家全住。ウォーターフロントのすばらしい邸宅にお住まいになって現在は貿易商。なぜオーストラリアに全住かつ永住なのかといういろいろお尋ねした。

この国の人々のゆったりとした、ゆとりのある、家族を大事にする、自然と融和した人間らしい生き方に共鳴されたようである。「働くということ、一生を生きるということ」の意味を、根底から考え直させるショッキングな話の連続であった。

④ シドニーにて

シドニーはオーストラリア一番の都市で、オペラハウス、ハーバーブリッジ、ダリーングハーバーを見学、シドニー湾ランチュルーズを楽しんだ。ここでは街の至るところに、「二〇〇〇シドニー」の大きな看板があり、来る二〇〇〇年のオリンピックの招致運動を盛んにやっている

る。

最後に、どこへ行っても日本人観光客は多い。ときどき、ここは本当にオーストラリアなのかと思う。言語と看板を除けば全く日本と同じ、それもそのはず、今や日本はこの国にとって最大の経済パートナー。輸出の三分の一、輸入の四分の一が日本向けである。

カランビン野鳥園は北海道のクマ牧場が買収したそうだし、シーワールドも、日本の奈良観光の経営である。日本が手を引けば、この国はこけるのである。とは言うものの、日本も、この国の恩恵を受けている。両国は、今や切っても切れない関係なのである。日本人の偉大さと日本の経済の大きさと、今や世界は一つを改めて認識した。

一家でオーストラリアに移住された渋谷先生にお会いして、夜遅くまでオーストラリア生活のことを伺ったが、「英語のプレッツシャーから解放されるのに一年かかる。それを克服すれば本場に住みやすいよいところですよ」と言っておられたのが印象に残っている。

J.C.を卒業した翌年の昭和五十七年に小野ロータリークラブに入会した。現在までに、国際ロータリー年次大会には、平成元年五月韓国ソウル大会、五年五月オーストラリア・メルボルン大会、六年六月台湾・台北大会、八年六月イギリス・グラスゴー大会、十年六月シンガポー

ル大会、十六年五月日本・大阪大会に参加している。

そのたびごとに、クラブの会員とともに、家内や子どもを同伴して海外旅行をした。すべて記録や旅行記を残している訳ではないが、オーストラリア大会には、次女と一緒に行った。この後、八年六月に兵庫県信用組合創立四十五周年記念で、カナダ一周旅行をした。この時は長女と一緒に旅行した。

西安・敦煌・タクラマカン（平成十二年八月五日）

昭和三十年代に読んだ井上靖の小説『天平の夢』^{いしづか}（昭三十二）、『敦煌』（昭三十四）が妙に印象に残っており、いつかシルクロードの旅をしたいものだと考えていたが、最近『敦煌の夢』（王家達・著、徳田隆・訳、平十二）、宮本輝『ひとたびはポブラに臥す』巻一〜巻六（平十二）を読むにつけ、ますますその気持をかき立てられることとなった。

また、昨年から、小野ロータリークラブは地球環境保護のため「砂漠の緑化」運動を提案しているが、砂漠はどこなところなのか。地球の砂漠化防止と植林の実態をこの眼で見たいという気持もあり、今回、小野ロータリークラブの松井会員を誘って、西安、敦煌のツアーに参加した。

中国の国土は世界の陸地の約十五分の一で、ヨーロッパ全体の面積とほぼ同じ広さ、また西

安や、敦煌のある中国西北部は中国全土の約五分の一を占める広大な地域であり、東の内モンゴルの砂漠から西のタクラマカン砂漠まで、北に天山山脈、南に崑崙山脈が横たわり、それぞれの山脈の麓にオアシス都市が点在する地域である。

まず旅の出発点は西安。関空から直行便で約四時間、ここはシルクロードの西の玄関口、唐の都長安として栄えたところである。

『天平の薨』は、天平の昔、荒れ狂う大海を越えて唐に留学した若い留学僧・普照、栄叡、戒融、玄朗が、故国の便りなく無事な生還も期し難い苦難を越えて、在唐二十年の放浪の果て、高僧・鑑真和上を伴って普照ただひとりが故国の土を踏んだという、現代では想像を絶する歴史上の真実を伝えた小説である。

西安では、世界第八番目の奇跡だと言われる兵馬俑抗を見学。中国に十九カ所ある世界遺産の一つ。秦の始皇帝を守る等身大の歩兵を中心とした陶俑と陶馬の縦隊。一九七四年地方の農民が井戸掘作業中に偶然発見したという。

慈恩寺の境内に立つ高さ六十メートル余の大雁塔は玄奘三蔵法師が、二十七才のとき国禁を犯してインドに赴き、四十三才で帰国、持ち帰った多くの経典を翻訳し、納めたところで、現在には七層の建物。

西安ではこのほか秦の始皇帝陵や、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の恋の舞台であった華清池や歴代

書家の名碑文を集めた碑林博物館を見物した。

次に、中国最西端の町、敦煌まで飛行機で約二・五時間、途中は河西回廊のオアシスの町、蘭州、酒泉、嘉峪関…を除いて砂漠、砂、砂漠。ここは、中国最西端の町、ここから西は、かつて漢民族から西域と呼ばれていた。

『敦煌』の舞台となった砂漠の町は、現在も映画のセット「敦煌古城」として保存されている。西夏との戦いによって敦煌が滅びる前に、万巻の経典をその砂中の洞窟に秘した西域に惹かれた一人の若者・趙行徳のあとを追いながら綴る中国の歴史口マン。

この洞窟が二十世紀になって初めて陽の目をみた莫高窟であるが、大砂漠の中で人類の至宝「莫高窟」を愛し、命をかけて守り抜いた常書鴻、張大千の努力を描いた『敦煌の夢』（王家達著）は、中国最高の文学賞「魯迅文学賞」を受賞し、日本でも最近翻訳が出た。

世界遺産莫高窟は岩壁に掘られた四九二の石窟に無数の壁画や色採仏塑が収蔵されている。「ここは中国だ」と主張しているような仏教美術の大画廊。

一九〇〇年五月、千仏洞と呼ばれた莫高窟の蔵経洞はここに住みついた無学の僧・王円禄（王道土）によって偶然発見された。これは二十世紀最大の発見と言われる大発見であるが、西域を旅したイギリスの探検家スタイン、フランスのペリオ、そして日本の橘瑞超らによる大谷光瑞探検隊、ロシアのオルデンブルグの探検隊が、それぞれ訪れては敦煌の貴重な宝物を持ち帰っ

た。これら敦煌文書の研究は中国の新世紀を画し、世界地図の空白部分が埋められていったと言われている。

この本で印象的であったのは、諸外国の探検家による文物の収奪者たちを大泥棒呼ばわりすることなく、もし、スタインやペリオらがいなければ、無学な王円禄やその弟子たちに焼き尽くされていたと記していることである（六十頁）。もともとこの敦煌文物が発見されてから後の中国も政治的大混乱が続き莫高窟を守り通した常書鴻らの努力は並大抵のものでなかったに相違ない。平山郁夫と日本人（第六章）も感動的。

今から三年前の一九九七年、莫高窟の姉妹窟とも言える榆林窟が見学者に解放された。ここは敦煌から東へ一三〇キロメートル、砂漠の中に、榆林窟だけしかない。約三時間オンボロバスで建物はおろか、一本の木もない砂漠の中をひた走る。時に蜃気楼が地平線に現われ、時に竜巻を見る熱砂の中にポツンと現われる。こんなところに観光に来るのは余程のことと思うが、地平線まで続く砂漠には感動する。

敦煌から西へ八十キロメートル行くと、そこは陽関。漢代の関所で当時はここが中国西北の国境であった。「西のかた陽関を出ずれば故人（親しい人）なからん」という王維の詩の一節は有名。ここから西がタクラマカン砂漠なのだ。熱砂と不毛の大砂漠が地平線を越えて広がる。敦煌のもう一つの観光名所は鳴沙山。南北二十キロメートルに連なる鳴沙山は通常日中は砂

が熱すぎて登れないので夕方に観光をするところ。砂礫の堆積した砂山、その北側にあるのが月牙泉、砂漠の中の透明の泉。

宮本輝の『ひとたびはポプラに臥す』は、作家・宮本輝が西暦三五〇年ごろ龜茲国（現在の新疆ウイグル自治区）に生まれ、九才で天竺に渡りサンスクリット語の漢語訳を生涯の仕事とした鳩摩羅什の苦難の足跡を車で踏破する大紀行文。

羅什が死を賭して旅立った砂漠の道、ひたすら続くゴビ（小石まじりの砂漠）にあつて「ポプラの木陰はかけがえない恵み」とこの変な題がつけられている。西安から蘭州、嘉峪関、敦煌、トルファン、クチャ、カシュガル……と続く古代シルクロードの道を車でゆく大変な旅。本文の一行一行と写真がすばらしい。

中国西北部の砂漠化防止の話をしてまとめにしたい。私が始めて砂漠を見たのは、アメリカのラスベガスから、途中フーバーダムを経てコロラド渓谷を上り、グランドキャニオンまでのネバダの砂漠を、観光客四人でリムジーンに乗って走行したときである。これはまっ黒い土、ところどころ大きな岩石があつたと思う。

中国の西安から敦煌までの河西回廊の砂漠（これは機上から見たのだが）や、陽関、榆林窟から見たタクラマカン砂漠（と言っても砂漠の辺縁）は、まっ黄色の小石まじりの砂の砂漠である。これをゴビと言ったりゴビ灘と言ったりしている。

白い砂漠もあると言うことなので世界にはいろいろな砂漠があるということが分かる。私たちが参加したツアーには砂漠化防止のための植林が組み込まれており、ポプラの苗木作りの現場で中国の植林事情を見てきた。

最近、中国政府は甘肅省など西部地域の十三省、自治区、直轄市で非耕率な耕地を森林や草地に戻す大規模な植林計画に着手した。土砂流出や黄砂防止などの環境保護が最大の狙い（日経紙 平成十二年四月二十八日）。

砂漠化した大地での植林の可能性と、重要性を砂漠の中のオアシスの町の郊外で実感して、地球環境保護のために全世界の人々が立ち上がり「砂漠化した大地に植林を」の運動が成功することを願わずにはいられない。

ロシア・サンクトペテルブルク（平成十五年八月五日）

昨年十二月、高校時代の友人の土肥寿秀君より、当時サンクトペテルブルク・ネバロータリークラブの会長であったイリナ女史を紹介された。土肥君は、工学博士で二十年以上の光学関係の国際ビジネス活動と、金沢大学等での客員教授を務め、英語は堪能。

イリナ女史はサンクトペテルブルク大学の教授で英語を難無くこなすロシアの光学研究者（主人のマークも英語ができる元ロシア・アカデミー）。

そこに中途半端な英語しかしゃべれない私加わり、大阪で一泊して楽しい会合を持った。その後何回かメールの交換をした。

その土肥君より白夜の好機にサンクトペテルブルク旅行をしようと提案があり、これは絶好の機会と一も二もなくロシア行きを決意した。

ロシアという国については、元秘密警察のスパイであったプーチン大統領の目つきが気に入らないなどと、あまり論理的でない勝手な想像をしていた。しかし、今回行ってみて分かったことだが、ロシア人は一旦気心を通じ合えば、随分親切で、思いやりのある国民である。イリナとマーク夫妻はもちろん、ロータリークラブの会員にも随分親切にいただいたし、現地の日本語ガイドも、英語ガイドも、ミニバスの運転手もみんな親切であった。

サンクトペテルブルクは人口四七〇万人のロシア第二の都市、ロシアもウラル山脈以西はヨーロッパロシアと言って、ウラジオストックやナフトカのアジアロシアとは異なる。ソ連時代はレニングラードと言っていた。

ピョートル大帝により建都されて以来、今年で三〇〇年、建都三〇〇年記念祭を行っている。帝政、社会主義、共和国と全く異なる政治体制のなかで、農奴の過酷な労働、皇帝の恐怖政治、そしてたびたび戦争を繰り返しながら、その歴史と文化の遺産を色濃く残している都市であり、ロシアで一番美しいといわれている。プーチン大統領の出身地であり、この春エビアンサミッ

トの前に国際会議が行われた。

ロシアは、大手旅行社の主催旅行に参加するのは簡単だが、今回のように四人だけの個人旅行となれば結構大層な手続が必要である。まず、ビザが必要だし、バウチャーと証する予約引受書と支払い証明書が必要である。これを大阪では、ごく特定の小規模専門旅行社が行っている。

七月三日に依頼して航空券、ビザ、ホテル予約のバウチャーと全部揃ったのは十六日、出発は十九日である。日本人にはよく分からないロシア人的感覚である。どこに行っても並ばされるし、また並んでおれば出来る国なのである。土肥君も私も出発の前日まで仕事で大変だったので、実際は当日に空港で書類を頂いた。

七月十九日(土) 午前七時自宅を出発、高速バス、阪急バス、空港リムジン・バスを乗り継いで九時四十五分関空着。関空では、中学時代の同窓で今は加古川市議の名生昭義君と、もう一人大学の同じゼミの河崎利男君と出会った。みんなそれぞれによく活躍している。

アエロフロートSU—五五〇便は十二時十分定刻出発。約十時間でサンクトペテルブルク空港に到着。イリナとマーク夫妻の出迎えを受け、ホテルへ。日本同様暑い。

ホテルは市内中央部モスクワ駅の前のオクチャーブリスカヤ。古い歴史のあるホテル、メイ



ピョートル大帝夏の宮殿にて

ンのタワーは十九世紀の建物だそうである。部屋はリニユールしてあり美しい。ロシア人とヨーロッパ人相手のホテルらしく、六連泊日本人に会ったのはたった一回一人だけ。フィンランドから入国して来たと言っていた。

七月二十日(日) 日曜日なのでマークが十時にホテルに迎えにきてくれる。二台のタクシーに分かれ、エミルタージュ美術館前の乗り場からホーバークラフトでネバ川を上ること四十分でピョートル大帝夏の宮殿(ペテルホフ)に到着。この噴水公園は世界的に有名。

午後三時過ぎ、同じコースを戻り、午後九時イリナとマーク宅を訪問。この時間になっても太陽は沈まない。午後十一時頃退去したがこのときもまだ明るい。白夜を実感。イリナの手作りの料理をいただく。ウオッカは私にはちよつと無理。

七月二十一日(月) ミニバスで市内観光。日本語ガイドのカーチャさんは、日本語に英語を交えて案内してくれる。

市内観光スポットには世界中から観光客がきている。午後は、プーシキン市のエカテリーナ宮殿へ。

江戸時代、沖船頭大黒屋光太夫は、大暴風雨に遭遇して、破船。極東ロシアの離島に漂着。その後ロシア領内を十年にわたり転々として、最後は、エカテリーナ女帝に引見、帰国を許されたという引見の大広間や琥珀の間を見たかったが（吉村昭の小説を読んで知っていた）、カーチャの努力にもかかわらず切符を入手することが出来ず、建物内部には入れなかったのは残念。夕刻、市内レストランで夕食。ボルシチが美味しい。その後、夜のモスクワ駅へ。夜行列車に乗る人で一杯。改札口はなく、ホームで車掌が切符を売っていた（サンクトペテルブルクには市内に五つの駅があり、それぞれの駅名に、行き先の名前がついている）。

七月二十二日（火） 今日も、ミニバスでイリナとイリナの姪のナーシャと共に、一日かけてノブゴロドへ。ノブゴロドは、サンクトペテルブルクの郊外にあるロシアで最も古い町のひとつ。ロシアの歴史発祥の地として今なお偉大なるノブゴロド公と敬意を込めて呼ばれる。ロシア歴史の原点の町だそうである。日本語ガイドがないので英語のガイドを依頼。丁寧な発音だが中途半端な理解に終わる。近くの湖では、ロシアの若い男女が短い夏を楽しんでいた。

七月二十三日(水) 十時からエミルタージュ美術館へ。先日、エカテリーナ宮殿に入れなかったので、カーチャさんが要領よく切符を入手、長い行列に加わることなくエミルタージュ美術館入館。

建物自体も素晴らしいが、この美術館内部は本当に素晴らしい。超一流とはこれをいうのであろう。これだけ時間をかけてゆっくり見れば、芸術作品に酔うという言い方が正しいのかも知れない。午後三時まで見学。

その後は有名カフェ「文学喫茶」で遅い昼食。夜はニコラフスキー劇場でロシアのフォークダンスと歌と踊りのショーを見る。

七月二十四日(木) サンクトペテルブルク一番のホテル「グランドホテル・ヨーロッパ」のすぐ近くの二つの百貨店へ。一つはパサージュという超高級店。客の数より監視人の数の方が多い？

もう一つはガステイヌイド・ボホールという途轍もなく広いマーケット。ブロックごとに監視人がいて、飛行場にある検査機と同じ機械で、スリや犯罪を防止している。ここまで国民を監視するののかという感じがして、古いソ連を見るような思いがした。

夕刻サンクトペテルブルク・ネバロータリークラブにメイキャップ。例会場は第一と第三木



サントペテルブルク・ネバロータリークラブの例会にメーキャップ。写真右が前会長のイリナさん

曜日はグランドホテル・ヨーロッパで、第二と第四木曜日はドイツ商業会議所と変わるそうである。私が行ったのは第四週であったのでドイツ商業会議所の古い建物。

私は紹介されて、英語でスピーチをした。ここはロシア、何でも喋ろうと勇氣百倍。「人生夢浪漫」「ポリオ撲滅」をベースに予め準備した原稿でスピーチ。日本ではこんな話にしたこともないし、またすることはない。驚いたことには前会長のイリナが一区切り毎にロシア語に通訳してくれた。お陰で大きな拍手をもらい、本当に嬉しかった。

七月二十五日(金)二十六日(土) 十一時にホテルをチェツクアウト。国内線でモスクワへ。モスクワで国際線に乗り換え閑空に帰って来た。ロシアの国内線は、ツポレフやイリュージョンという機材を使っている。しかし、私が乗った限りではよい飛行機である。座席が木製であるのにはちよつと驚く。

モスクワには民間機だけの空港が五つもあるがみんなバラバラに立地していて移動が大変。国防第一がこんなところにも現れている。

サンクトペテルブルクには六連泊したが、滞在中の計画は総て英語で、イリナと土肥君が行ってくれた。ロシア語など分かる訳がないのだから彼らの英語のお陰である。滞在中のイリナ・マークの親切に感謝するとともに、土肥君本当にありがとう。

私は、普段日常生活には車椅子は使っていない。今回は車椅子を日本から持参して、海外旅行のノウハウを得ることができた。ロシアにも車椅子を押してくれるポーターはいるらしいが、ほとんど車椅子を押してくれたのは土肥君である。

ニューヨーク・ロチェスター・ナイアガラ（平成十六年十月二十五）

最近数年間、夏の比較的業務の閑散な時期に海外旅行をしている。今年はそのころ、腰痛に悩まされたのと多忙でチャンスを失っていた。

十月初旬、友人の土肥君より、「西村君、北米とカナダを旅行しないか」とお誘いを受けた。二人で相談して土、日、祭日を含め、一週間がとれる十月八日から十五日まで、アメリカの東海岸からカナダまで旅行することにした。

私は、一生に一度は世界の金融の中心、資本主義経済社会の到達点、アメリカの縮図といわれるニューヨーク・マンハッタン島に行きたいと考えていたのでここに行くことを付け加えてもらった。

十月八日（金） 滝野町を十二時十分発の中国ハイウェイバスで宝塚インターまで、その後伊丹空港を経て、関空までリムジン・バス、三時過ぎに関空到着。スーツケースと車椅子は前々日にクロネコ便で空港に送っているので出発は極めて軽装。

関空で友人夫妻と合流、荷物を受け取り、ユナイテッド航空のカウンターへ。その後、NTTドコモのカウンターで海外専用ケータイ電話を受け取り、十七時五十分発のUA機に搭乗、長い旅の始まりである。

シカゴ空港での入国審査が厳しいのには驚いた。靴は脱がされる、着衣のポケットのものはすべて籠に入れる、指紋は採られる、写真は撮られる。しかし、これだからアメリカの安全は護られているのだと一人納得。

十月八日（金） シカゴ国際空港を経て、ロチェスター空港へ。飛行機はいずれも超満員、シカゴ空港のドでかいのに驚く。空港から以後連泊することになるハイアットリージェンシーロチェスターホテルへ。アメリカをはじめ、先進国では、公共のスペースにおける障害者サービスは完璧。これはなにも私だけではない。老人も大勢車いすのサービスを受けている。これは、すべてチップで解決する。本当に有り難いことである。

十月九日(土) ロチェスター空港より、コンチネンタル機でニューアーク空港(ニュージャージー州)へ。ここで、元ロタリー財団留学生の小幡(陰山) みどりさん夫婦の歓迎を受ける。彼女は、ミネソタ大学留学終了後、東京での勤務を経て結婚、渡米して三年半経つそうである。渡米後、男の子ができた。事前のメールのやり取りで随分ニューヨーク情報を教えてもらった。モノレールでレンタカー会社のある駅へ、真つ赤のトヨタ・カローラをハーツ社で借り受け、小幡さんらと待ち合わせの場所、ニュージャージー側からマンハッタンの見えるフェリー乗り場近くのレストランでブランチ。

その後、リンカーントンネルを經ていよいよマンハッタン島中央部へ、セントラル・パークの西側を北上、公園をぐるりと一週、五番街の高級店(ブランド街)を横目でチラリと見て南下。リトルイタリー、チャイナタウン、九・一一事件のトレードセンタービル跡地を見学して(復興ビルの建設工事が行われていた)、地下鉄ウォールストリート駅北、ニューヨーク証券取引所近くのホテルに到着。

夜は、四人でタイムズスクエアへタクシーで繰り出す。俗物の巷、なんでもありのニューヨークの夜を徘徊。厚いジャンパーにマフラーをしている男から、臍を出している女、タンクトップの女までいる。白人あり、黒人あり、アジア系あり、中東系あり。世界のお上りさんが一晩中集う四十二丁目を、グラセン駅から八番街まで、俗物の集合体、巨大広告、どぎついネ



ニューヨークで家内と。後方はブルックリン・ブリッジ

オンを観光、飽きることなくピープルウォッチング。深夜一時までエンジンジョイ。

十月十日(日) 今日にはニューヨーク証券取引所や、国連ビルの内を見学したいと思っていたが、日曜日のため断念。レンタカーでマンハッタン島の最南端にあるバッテリー公園へ。古い要塞らしいが今は何も無い。ニューヨークは格子状(グリッド)に街が計画的につくられているので、ロアーマンハッタン(最南端)の一部を除き非常に分かり易い。

晴れてきたので、西側のハドソンリバー沿いにあるヘリコプターツアー乗り場へ。二十分間、小型のヘリで南の端の自由の女神像から、北のハーレム上空までマンハッタン島を一周して上空から観光。あとは再びレンタカーで、東側のイーストリバーに架かるブルクツリン橋の袂にあるピア17のリバーカフェへ。ここはニューヨークツアーの定番。

ここで買い物をしている家内ら二人を残して、エンパイアステートビルのある三十三丁目まで北上、ぐるりと一周して再びブルックリン橋下に戻って、今度はホランドトンネルを経て

ニューアーク空港へ。ここでレンタカーを返して、コンチネンタル機でロチェスターに戻った。世界一、車の混んでいるニューヨークで左ハンドルの車を使いこなす友人の腕前にしきりと感心。しかし、彼は疲れたと思う。

十月十一日（月）今日はコロンプスデイ。アメリカ国民の祝日。朝からレンタカーでコーニング市のガラス美術館へ。ここに本社を置くコーニング社は、世界のガラス最大手。世界の情報機器のガラスの大半はここで造られるそうである。エジプト時代のガラス製品から最先端のガラスアートまで、一日見ても見飽きない。

十月十二日（火）ホテル近くのコンベンションホールで開かれている世界光学トレードショーの会場へ。その後、ロチェスター大学光学研究棟で行われているロチェスターロータリークラブの例会にメークアップ。

いつもは、ホテルで開かれるが今日は会場変更。事前に友人の紹介により、ロチェスターロータリークラブ国際交流委員長のスーさんとメール交換をしていたので、当日は、外国人の来訪ロータリアンとして歓迎を受けた。

小野クラブのバナーを贈呈、その後ショートスピーチ。拍手喝采。うれしい。実に楽しい、

にぎやかな例会風景であつた。その後、市内中央部のショッピングセンターで買い物。この物価は、比較的安いように思うと家内が言っていた。夜は、光学関係の学会に出席された日本の大学教授らと食事。光学関係の研究者はすべて友人の知人。

十月十三日（水） 今日、朝からレンタカーでナイアガラの滝へ、家内を除き全員二回目以上。霧の乙女号（滝観光船）は、今月二十四日でクローズと表示されていた。黄葉が美しいところどころ真つ赤な紅葉もあり感動。写真に上手く写せないのが残念。アメリカ滝側から橋を渡ってカナダ滝側に行き、ゆっくりと滝を観光。ナイアガラ川の中央で国境を分かったので、滝は両方の国に所属している。

夜はアメリカ人三人と共にホテルで食事。にぎやかな食事である。自分の食べたいものをメニューから選べないのは残念。これは海外で生活しないとダメ、英語も内容も両方わからない分量の多いのには閉口した。

十月十四日（木） 早朝四時に起床して五時三十分発のUA機でシカゴへ。ここで、四時間余り休憩、ここから友人の奥さんはダラスへ、私たちは再度UA機で関空へ。荷物は口チエスター空港から、関空までゴースルー。これは本当に助かる。

十月一日(金) 十三時間余りのフライトの後、関空へ、超満員の飛行機の中で狭い椅子に座りつづけるのは並大抵ではない。私はいつも、ビールを飲んでから睡眠、あとは映画を見る。U Aの食事は案外美味しい。

旅行中の事務所への連絡は、NTTドコモのワールド・ウォーカーのお陰で、日本、アメリカどこでも、番号はそのままで瞬時に繋がる。ファックスは事務所から毎日ホテルへ、必要な情報は瞬時に世界を駆け巡る。困るのは時差だけ。留守中、事務所職員の頑張りに感謝。いろいろお世話になった土肥君と奥さん、本当にありがとう。

満州国の遺産―長春・ハルビンの旅(平成十七年九月五日)

終戦から六十年に当たる今年は日露戦勝から百年に当たる。日露戦争で勝利した日本は、当時ロシアの占領下におかれていた満州の地からロシア勢力を追い出し、以後、莫大な資本投下を行い、中国と日本から多くの移民を受入れ、満州を支配してロシアの南下を阻止した。

日露戦争後の日露講話条約に基づく日清条約及び対華二十一カ条要求の二つの条約によって得た満州における権益を守り抜こうとした日本は、中国との衝突を繰り返しながら、やがて昭和七年二月に満州国を建国して、前の戦争でポツダム宣言受諾、無条件降伏で終戦をむかえるまでの十三年半、満州国の存在を支えインフラ整備に寄与した。

その当時首都であった「新京」（現在の長春）を旅して日本人が満州に残した多くの遺産を見ることは、旧軍人を父にもつ私にとって大変興味深いことである。

今回、友人の土肥君から旅行の誘いを受けたとき、長春は中国東北部の田舎の都市であるため移動に困難を感じたが「まあええやんか」という彼の親切な言葉に感謝して、車椅子を持つて参加することとした。

私の父は、満州国建国後の昭和八年、志願兵として、蘇満国境の守りにつくこと二回（吉林省、黒竜江省）、その後中国・華北の戦線（華北省、江蘇省）につくこと一回の渡満、渡華を繰り返して、負傷して内地還送・療養、前の大東亜戦争中は、陸軍士官学校を経て、津の三十三連隊で伊勢神宮を守って終戦をむかえた旧職業軍人である。

父方の祖父は日露戦争に従軍、生涯、日露戦勝を自慢していた。私自身、日露戦勝後の日本の近現代史に関心を持っていた。土肥君の知人で、日本語のできる学者、研究者、ビジネスマンの案内が受けられること等々を考慮すればこれはまたとない機会である。

八月二十一日（日） 早朝六時、中国自動車道・滝野社インターで関空直行乗り合い便「はくろタクシー」に乗車、日曜日のため、道路が空いたので七時五十分に関空到着、まもなく土肥君夫妻、同行の杉本さんと合流、クロナコ便の車椅子を受領、両替をすませ中国国際航

空で出発。

北京空港を経て、長春の空港では崔さんがお迎え、崔さんは、元長春光学精密機械研究所教授で、リタイアー後は、蒸着材料の会社社長。いわゆるベンチャー企業の社長。アウディの高級車で空港まで来てくれた。

崔さんは、八十年代はじめに日本の学習院大学に留学、当時の指導教授であった小川教授の著書を翻訳しながら日本語を勉強した。土肥君との接点は中国科学院の研究所とのこと。夜は、本場の水餃子を囲んでみんなで楽しく夕食。ホテルは名門飯店（Noble Hotel）、長春では五つ星のホテル。市内中心部にあり、新しく快適、四連泊した。

八月二十二日（月）土肥君は早朝から「中国科学院・国際光学委員会研究大会」に参加したので、土肥君の奥さんと杉本さんと私の三人で崔さんのアウディで長春見物。ホテル出発九時。

まず、最初は、偽満皇宮へ（ウェイファンゴン）へ。ここは、清朝最後の皇帝・愛新覺羅溥儀が暮らした皇宮。隣にある吉林省博物館を併せ見学に四時間はかかる。朝鮮族の崔さんは、案内ができないので（あまり関心がない？）日本語のガイド機器を借りてくれた。これは場所を移動するたびにアンテナが電波をキャッチして日本語による案内が流れるイヤホンつき

のＩＴ機器のすぐれもの。

わずか十三年半しか存在しなかった満州国の皇宮がそのまま残されており、蠟人形が置かれ、当時の溥儀とその家族の生活がすべてわかるようになっていいる。解説は事実を淡々と述べていいるようである。売店でひとりだけ日本語の分かる美人に「ここでは（日本のしたことは）すべて偽（ウエイ）なんだ」と言えば黙って笑っていた。

隣の博物館では溥儀の生涯が写真で展示されている。土肥夫人、杉本さんと私の三人で声を潜めながら、この国では「左」が正義なのですよねと議論することしきり（ラストエンペラー溥儀の生涯については、趙継敏―日本語版ほか多数の著書あり）。

昼食は、東北料理専門店で満州料理。鹿の肉が入っていた。私は、中国料理はすべて美味しいと思う。油が臭いという人や、水が汚いので危ないとも言っているがあまり気にすることもない。

午後は長春電視台（テレビ塔）に昇り市内を一望。整然とした町並みはこの街が計画的に作られたことを表している。その後、現在建築中の崔さんの工場（開発団地）を見学、引き続き、崔さんが購入したという新しいマンションにお邪魔した。崔さんは学者出身の成功者。百歳まで頑張ると言っていた。共産主義国家でありながら、埋めようのない貧富の格差が至るところに発生しているのが現在中国の現状。

市内の南湖公園を観光の後、七時から、宿泊している名門飯店で行われている国際光学委員会の歓迎レセプションに参加。土肥君は世界中からの研究者と旧交を温めていた。随行者も大勢参加している。

八月二十三日（火）土肥君は前日に引き続き会議に参加。今日は崔さんの都合がつかず、三人でタクシーに乗って観光。まず、最初に日本が長春に残した偽國務院（The Pappet States Council）、偽滿交通部、関東軍司令部官邸、偽滿外交部、偽滿法衛、偽滿軍事部、偽滿司法部の八つの建物（偽滿州国八大部と呼ばれている）を見物すべく計画したが、実際に観光客を受け入れているのは偽滿國務院だけと分かる。八つの建物はすべて吉林大学や共産党の施設、長春市の施設として現在も立派に利用されている。

リットン調査団が、国際連盟において滿州国をパペット・ステーツと決めつけて以来、滿州国（の国）機関にはすべて、偽、ウエイ、パペットを冠している。日本は滿州国において、道路、鉄道・市電、通信、港灣、空港等交通の充実、農業開発、鉄工業の振興、上下水道、電力供給、治山治水などあらゆる国土開発に専念。それらの施設は、名称を変えて今なお中国東北部各都市の生活インフラとして立派に利用されている。

日本人が滿州で行ったよいことの代表は、治安がよかったこと。幣制改革が行われ、中央銀

行券の信用は絶大であったこと。交通が開けたことの三つである。荒野の満州に鉄道や道路網を整備し、通信網を完成、学校、病院工場を造ったことは高く評価されなければならない（『満州国崩壊の日』榛場英治、昭和五十七刊。これは直木賞受賞作家の小説であるが、満州国の建
国から崩壊までが元満州国官僚の眼でよく描かれている）。

嘗ての満州国・國務院の建物は、日本の国会議事堂をまねて造ったと言われている。現在は医科大学の研究所になっている。一階部分では、日本語のできる美人が観光案内をしている。また、顧問と称する年輩の人が、流ちょうな日本語で軍歌を披露して満州国時代のことを話してくれた。二階は見る事ができませんと言いながら、今日は特別なのか？ 人体標本室を見学させていただいた。ホルマリン漬けの人体臓器の標本は、初めて見る私たちには異様なものであった。

昼前に長春駅前の春誼蔡館（旧ヤマトホテル）にて昼食、ヤマトホテルは旧満鉄が経営していた有名ホテル。満州の各都市に存在している。建物は古いが、立地はよく、現在でも営業を続けている。

昼食後、旧満鉄の長春駅に行く。一九九五年に立て替えられており、満鉄のイメージは残っていない。長距離列車の発車基地となっている。駅を背にして人民大街をホテルまで四キロ散歩。「タクシーに乗りましょうよ」と言いながら、車椅子でタウンウォッチング。車の多いのと、

通行者の信号無視には呆れかえる。インフラ整備を大きく超える経済成長が、交通体系をいびつにしているのは中国のどの都市でも見られる現象。土肥夫人も杉本さんも健脚。本当にありがとう。

三時から、光学研究所の見学ツアーに参加。私にはよく分からなかったが、ここで待ち合わせをして参加した土肥君は、中国の研究水準の発展ぶりがよく分かると言っていた。

バスでホテルに帰り、ホテル近くの一般食堂で夕食をとり、ホテル周辺の裏町を散歩。

八月二十四日（水） 土肥君を加え、四人でハルビンへ。当初の計画になかったが、折角ここまで来たのだから、旧満鉄でハルビンへ行こうと計画したが四時間もかかる。これではたまたまない。そこで、崔さんの知人が車で高速道路を使ってハルビンまで往復してくれることとなった。

行けども、行けどもコウリヤン畑。地平線の果てまで収穫期前のコウリヤン畑を走ること三時間弱、ハルビン工業大学正門前で崔さんの友人で、日本語のできるハルビン工業大学・理学院の千正男教授（日本の有名歌手と同じと笑っていた）のお出迎えを受ける。ロシア料理の店で昼食歓談の後、侵華日軍第七三一部隊陳列館へ。

ここは、戦時中細菌兵器研究をした七三一部隊の本部跡地に造られた陳列館。犠牲になった

とされる中国人捕虜らの遺品や実験の様子が蠟人形で陳列されている。われわれ日本人四人は、格別丁寧に淡々と長時間、日本語による解説を聞くこととなった。過去の忌まわしい事実だけを詳しく説明しながら、眼で日本批判が行われている？

石井四郎部隊長の執務機の写真と建物全体の写真を撮っただけで、ほかの写真を撮る気にはならなかった。千教授は黙って一緒に説明を聞いていた。六十年も前のことではあるが、これは負（マイナス）の遺産、特に罪証文物と称する展示物と、蠟人形による現場再現には目を覆いたくなる。

土肥君は、「科学者の端くれとして七三一部隊は許せない。石井四郎以下幹部は、十分判断力、発言力のある東大、京大等の一部の医者である。言われてやりましたではすまない。世に言う Philosophy of Doctor (Ph. D.) とするのはそのような判断が出来る資質が認められた人に与えられる称号である」とこの偽科学者（軍医官）に対する評価は厳しい。研究に携わる人に求められる倫理観のあり方が問われている。

次いで、ハルビン最大の公園「太陽島公園」へ、松花江の中州に出来た公園。嘗てのロシア人の別荘地があったところ。旧満州にもこんなに美しい別荘地があるのだ。もと来た高速道を長春まで車で帰り、南湖公園内にある南湖ホテルで国際光学委員会の記念レセプションに参加。ここでは、中国科学院副院長曹健林さんの歓迎を受ける。曹さんは日本の東北大学で学位を取

得、中国に帰り政府系の研究者としては異例の出世。土肥君とは何年来の友人だそう。

この中国科学院は日本の学術会議みたいなものらしい。土肥君は約十年前から名誉教授になつていてと言つていた。少しでも学術的協力ができればとの気持ちでいまままで研究支援をしてきたそうである。

この会議に私たちが出席できるのは曹副院長らの配慮によるらしいが、土肥君は、私のことを彼の会社のファイナンシャル・アドバイザーだと紹介していた。

八月二十五日（木） ホテルをチェックアウトの後、長春空港を経て北京へ。北京では揚さんのお出迎えを受ける。揚さんは中国科学院・冶金工業部会建築総院教授、中国溶接協会役員。揚さんは十数年前大阪大学に留学したことがあり、土肥君はその際、彼のピンチを助けたと言つていた。真摯な定年前の学者。

昼食の後、北海公園へ。北海公園は故宮に隣接しているが、四人とも行ったことがない。遼、金、明、清と五代にわたる王朝が築いた宮廷庭園。公園の半分以上は人造湖。北京市内は揚さんの娘婿さんの車で移動。

夜は、揚さんとともに中国旅行最後の晚餐。すばらしい食事でした。北京では友誼飯店に泊まる。古いが伝統あるホテル。棟が何棟もあり、由緒ある調度品が揃っている。

長春では日本のBSテレビが第一、第二ともにはいるので日本のニュースはよく分かる。北京では日本のテレビは映らない。夜になると「南京攻略」のニュース映画をながしている。過去の日本の戦争の様子を極端に誇張して毎夜テレビで流して反日をおおっている。

中国共産党が、農民暴動を恐れ、反日を扇動して、国民の関心を外部に向け、政権維持に必死になっている様子が窺える。過去の問題に拘って日本の悪口ばかり言っている中国と今後如何につき合うか、本当に難しい問題です。民間レベル、個人レベルではみんないい人ばかりなのに。

八月二十六日（金） 九時から揚さんの研究所を見学。何棟もある研究所の中で、新しい建築資材の試作や研究をしているようであったが、環境に与える影響を調査していたことが印象に残っている。

昼食は揚さんの会社の社長による歓迎昼食会。一流の料理店で珍しい中華料理を一杯ごちそうになり（旅行中いろいろ種類の異なる中華料理をご馳走していただいたが、内容を詳しく解説できないのは残念です）、北京空港を経て関空へ。

帰りの飛行機の中で得た新聞、北京青年報に「抗日戦争勝利六十周年」の記事が出ていた。そうだ、中国は戦勝国なのだ。日本は敗戦国なのだ。歴史観は戦勝国によって創られ、敗戦国

の非はいつまでも問題にされる。

嘗て、満州国で、王道楽土・五族協和をめざした満州の理想は敗戦によってわずか十三年半で崩壊した。満州国とは一体何だったのか。蘇満国境を守り、ロシアの南下を阻止した軍人を父にもつ私には何とも割り切れない。日本が中国東北部の満州で行ったよいことが十分評価されていないのはいかにも残念だ。満州や北京で出会った多くの人が極めて好意的であったことを考えれば、反日が早く沈静化し、お互いに正当な理解の進むことを願わずにはいられない。

台風の影響で機材の到着が遅れ、出国は一時遅れ。関空からリムジン・バスで西宮北口まで。後は自宅までタクシーで深夜十二時に帰着。本当に楽しい有意義な旅行をすることができた。

スイス・フランス（アルザスワイン街道）（平成十八年十月四日）

九月十五日（金） 滝野社インターより、はくろ（乗合）タクシーにて関空へ（五時五〇分）
関西国際空港着後、土肥君夫妻と合流。スイスフラン（九十九円）ユーロ（一五四円）両替（近年、最高のユーロ高・円安で、旅行者には極めて不利、元もと、スイスもフランスも物価は高いのに余計高く感じる）。

KLMオランダ航空にて出発（十一時十五分）、アムステルダム・スキポール空港を経由して、

チューリッヒ着（十九時三十分・現地時間）。空港のAVIS（レンタカー）事務所にてオペル中型車を借り受ける。

暗くなつてから、チューリッヒの街の地図を見ながらホテルを探したが、なかなか見つからない。それもその筈、広告や案内看板、ネオンサインがほとんどない。スイスもフランスのアルザス地方も蛍光灯を使っていない。全部白熱灯を使っている。その分、街がきれい。二十二時ホテル着（Zurich Air Port泊）。

九月十六日（土） チューリッヒからルツェルン Luzern 観光の後、インターラーケン・オスト Interlaken-ost を経て、ユングフラウヨッホへ Lauterbrunnen。

標高七九六メートルから登山列車で Kleine Scheidegg、二〇六一メートルまで登る。最高点の Top of Europe にはもう一度十八日に登山することにして下山。

インターラーケン・オストの川沿いの小さなホテルを現地で予約して、再度山道をチューリッヒのホテルまで戻る。スイス旅行感動の始まり。

ルツェルンでは、街の中心部の市民憩いの川辺の広場を多くの観光客や市民がゆっくり散歩していた。ここで屋根のある古い橋を見た。「マディソン郡の橋」はアメリカの話だが、ヨーロッパにも屋根のある橋がある（NH Zurich Air Port泊）。

九月十七日(日) チューリッヒから、前日とは異なる平坦地経由(遠回り)で、ベルンBerg観光の後、インターラーケン・オストへ。今日は生憎の雨、市の中心部のレストランで、ゆっくり楽しく昼食、せかせかしない。みんなゆっくりしている。観光用の蒸気機関車が街中を走っていた(Hotel Rosshilp)。

九月十八日(月) 木彫りの街Brienz観光の後、Grindelwald 一〇三四メートルから登山列車でユングフラウのTop of the Europe 三四四メートルへ、終日世界一の名峰を観光の後下山。ヨーロッパの三大名峰、ユングフラウ、マッターホルン、シャモニーの中で、一番人気の高いユングフラウへは、インターラーケンから三社の登山列車を乗り継いで登る。

私たちは、一番目の終点までは、車で上っているので、残りの二社の登山列車を乗り継いで登る。最後はエレベーターで三四四メートルの展望台まで登る。世界一高い広い展望台、万年氷の廊下、一番高いところは吹雪、世界中から集まった観光客がみんな一様に感動していた(Hotel Rosshilp)。

九月十九日(火) インターラーケン・オストから古い城の町ツーンTün観光の後、ベルンBernを通過、バーゼルBaselよりライン河(国境)を越えフランスへ、コルマール

Colmar を経て、アルザスの街・ツックハイム Tuckheim へ。今回の旅行の最大の目的地はアルザス。これからあっと驚きの毎日が続くことになる。

国境超えの簡単なことに驚く。スイス入国の時もパスポートに押印しなかったが、車の国境超えは更に簡単、運転をしていた土肥君だけがパスポートを窓から出して OK。もちろん押印などしない。

そう言えば、帰国まで一度もパスポートに押印なし。私は最後の出国の時に、特に押印を申し出たので、スイス出国の押印だけがある。それも帰国してからよく見ると、Swiss Air Port 年 月 日だけ、これでは観光地の記念スタンプと同じ。一昨年アメリカ・シカゴでの入出国が嚴重であったのと大違いである。

アルザスは、ライン河とヴオージュ山脈に挟まれたドイツとスイスの国境沿いの南北に細長い地域。行けども牧草地か、低い森、ぶどう畑、木組みの家と美しい花々、醸造場でのワインの試飲に魅了される。アルザスワインはこの土地の文化そのもの。アルザスはビールでもフランス最大の醸造地であるが、ワインを嗜まずして美食家にあらず？ 今日からワイン党に変身 (Hotel Albergedu Brand 泊)。

九月二十日 (水) 思いのままにアルザスの街を四カ所 (Riguawitz, Ribermanville,

Salestart, コルマル Colmar) を観光、アルザスの街ツックハイム Turckheim へ戻る。アルザスのワイン街道には一〇〇あまりの小さな都市があり、それぞれに個性のあるワインを造っている。

世界中にこんなに美しいところがあるのかと思うくらい美しい。木組みの家、石畳の道路、統一した建物の彩色、花一杯の街を、フランス語の地図を見ながら思いのままにドライブして、一日をすごした。

六組くらいしか泊まらない小さなホテルで、楽しい夕食を二時間くらいかけてゆっくり食べた。みんながそうしている。フランス人にとって美味しい食事は、文化そのものということらしい。メニューも、こと細かに注文する。「お任せ as you like」など言うものなら、「出て行ってくれ」といわんばかりにバカにされる。

メニュー選びは、小難しいフランス語のメニューから、簡単な英語に translate してもらって料理を決めるのだが、あるとき、何回聞き直しても dog leg と聞こえる。犬の足などまつぴらと断ったが、後になって分かったことは、dog leg ではなく、duck leg (鴨の足) であった。英語、フランス語両方ができる土肥君と奥さんの嘉子さんが苦笑していた。場所によっては、英語しか理解できない人のために、フランス語、英語が併記されたメニューもあるが、料理の教養に欠ける私には英語でも十分理解できない。それでも英語のメニューを見ておれば、dog

leg と duck leg を間違えることはなかったが、(美味なる鴨の脚の料理ではなくあひるの脚の焼き鳥をイメージしたかも知れない?) native の発音を瞬時の判断するのは難しい (Hotel Albergedu Brand 泊)。

九月二十一日 (水) ツックハイムから、ワイン街道をフランス中央寄りに南下してベルフォール Belfort へ、鉄道の中央駅にて Julian 君、J. Jacques & Cristine さんと合流、今日の夕食を共にすることを約束して、Ronchamp にある二十世紀で最も有名な建築家 Le Corbusier によって建てられたノートルダム教会 Chapelle Notre-Dame Du Haut を観光の後、土肥君が社長をしている会社 (Opit Works Co.) へ六ヶ月間インターンシップに来ていた Julian 君 (ベルフォール工科大学大学院生) の研究発表考査を聴講するため、ベルフォールに戻り、ベルフォール工科大へ。土肥君には予定の行動であるが、私たちまで極めて貴重な体験をした。

発表は、フランス語ではなく英語で行われていたので、門外漢の私にも少し分かったような気がした。夜は、Julian 君とその大学時代の担当教授 J. Jacques さん、その奥さん Cristine とわれわれ四人を加えて豪華に Enjoy meal and wine。なんでもこんなに楽しい夕食につき合わせていただけるのかと感銘。夕食後アルザスのホテルに戻る。この日ベルフォールロータリークラブを訪問し、バナー交換を計画したが事務局不在のため、J. Jacques 先生にお願いした (Hotel

Albergedu Brand泊)。

九月二十二日(木) ツックハイムからベルフォールを観光の後、ワイン街道をさらにスイス寄りに南下して、Mulhouseを経て、小さな湖畔の街MalBussonへ。最後の二日は、スイスのローザンヌで宿泊するつもりでいたが、J. Jaque先生から、あんな宿泊料金の高いところは止めて、近くのフランスのリゾート地に泊まることを教えていただいた。ローザンヌは世界一の保養地、施設もすばらしいが料金も高いそうである。フランス側の保養地もすばらしい(Lelac Saint Port Hotel)。

九月二十三日(金) フランスから、スイスのジュネーブGeneveへ入り、ローザンヌLausanne Ouchyからレマン湖Lac Leman周遊三時間。船中でスイス北部の現地民族の旅行者の団体と歓談(英語ダメ、フランス語ダメ、特定の人だけが英語ができた。ロマンシュ語?)。モントレーMontreuを経て、ローザンヌに戻り、再びフランスの湖畔のリゾート・ディボンヌDivonneに最後の宿泊。街の中心部のレストランで遅くまで夕食を楽しんだ。

レマン湖は、周辺の山や街が殊の外美しい。三十数年前に一度来たことのある土肥君らには感慨無量の様子であった(Hotel La Villa du Lac)。

九月二十四日(土) 再度、フランスのディボンヌからスイスのジュネーブまで、国境を越え、二十分で着く。空港でレンタカー(全走行距離一七六八キロ)を返却して、ジュネーブ空港からKLMオランダ航空にて、アムステルダムを経由して関西国際空港へ。

九月二十五日(日) 関西国際空港(午前九時二十五分)着、旅行荷物を受け取り、はくろタクシーにて滝野着(十二時三十分)。

スイスの魅力 スイス南部のツエルマット、サンモリッツ等マッターホルンの観光地を除き、ほとんどの都市を観光した。山には山の魅力あり、湖には湖の魅力あり、街には街の魅力あり、ここはやっぱり世界一の観光地である。すばらしいの一語に尽きる。

フランス・アルザス地方の魅力 強い独自性、確固たる伝統、美食の文化、この地は歴史、伝統、文化が住民生活のなかに根付いている。フランス外交の独自性は、「この美しい国」から生まれる。美しい木組みの建物や伝統的な景観の保護、美しい花々、それらはみんなフランス人の自信から生まれる。

マルセイユ・リヨン・パリ（平成二十三年九月二十日）

私は、七十歳になるまでに最後の海外旅行をしたいと考えていた。毎年、世界各地で開催されるS P I E（国際光学会）に出席している土肥君ご夫妻からのお誘いで、九月五日から十三日まで、フランスのマルセイユ、エクス・アン・プロバンス、リヨン、ボーン、パリー〇〇〇キ口を、レンタカーと車いすで、アイパッドを持って、家内を同伴して、四人で旅行した。

レンタカーは、土肥君の運転である。出発前に二人で決めたのは、コースの概要と出国、帰国の日程だけ、六月にANAの早割パリ便チケットを購入し、その後、最初の三泊のホテルを予約した。あとは順に土肥君が情報収集してネットで予約してくれた。

フランス旅行は、今回で三回目である。土肥君とはこの内二回ご一緒させてもらった。いつもいつもお世話になり、心から感謝している。

フランス国内、特にパリの交通混雑の中で、レンタカーを運転する土肥君の技量は超人的であった。彼は四十年前に、フランスのパリで運転免許証を取ったと言っていた。彼は基本的には英語でしゃべっているがフランス語もできる。

私は、旅行にアイパッドを持参した。毎日、滞在先のホテルで、ワイ・ファイ無線のサービスを受け（有料であったり、無料であったり、IDとパスワードが必要であったり、不要であったり、利用環境はいろいろであった）、会計事務所のメールを閲覧、業務連絡と指示をした。

時差を除けば何ら問題なく、日本にいるのと同じ状況であった。

インターネットは、ヤフー・ジャパンを開けばあとはすべて日本語。日本にいるのと同じ環境で、毎日の新聞やニュースが見られる。もちろん、ここまでたどり着くのに随分苦労したが、グローバル時代、ＩＴ時代を実感するため毎夜遅くまでアイパッドに挑戦した。

私は、フランス語は全くできないが、ヨーロッパでは、ホテル、観光地の案内所、空港などの公共スペース、インテリ階層のビジネスマンは、ほとんど英語が通用するので、自分の要求や意図を伝えることができる。

特に、観光地での旅行者同士の会話は、お互いに外国人同士の英語であるから実に楽しい。ベルギー人、スロバキア人などと楽しく会話をした。人生最後の素晴らしい海外旅行であった。

※マルセイユとエクス・アン・プロバンスは、南仏プロバンス地方の中心。

※リヨンは中央フランス・ローヌアルプ地方の中心、リヨンの歴史地区は世界遺産・ボーンはブルゴーニュの地方の中心、ブルゴーニュワインの集積地。

※パリ観光は、レンタカーで市街地の中心を周遊した。マルセイユからパリまで直線で八六〇キロ、実際の走行距離は一〇〇〇キロ以上であった。

九月五日（月） 伊丹発十七時五十五分→成田着十九時十五分、成田発（出国）二十一時五

十分↓ミュンヘン着十七時。現地時間↓ミュンヘン発(トランジット)十九時四五分↓マルセイユ着(入国)二十一時二十分。Marseille Vieux Port泊。

※早朝四時に起床し、自家用車で伊丹空港・駐車場まで、旅行荷物は伊丹空港からマルセイユ空港までゴースルー、伊丹〜成田間は、ANAのビジネスクラスのサービスを受けた。今まで何回も海外旅行をしたが、ビジネスクラスは初めてである。

九月六日(火) マルセイユは、旧港周辺が観光地帯、ヨット、観光船、漁船の基地。マルセイユから三時間の地中海クルーズを楽しんだ。半島の東側コートダジュール地方の中心ニース方面へ船の旅。昼食は地中海料理のヴィアベース(地中海雑魚のごった煮)、夕食はSPIE(国際光学会)参加者とホテルで会食、前にロシア旅行でお世話になったサンクトペテルブルクのイリナさん(大学教授)と十年ぶりに再会した。Marseille Vieux Port泊。

※一度は行きたかった期待の地中海クルーズ、小ささまざまな客船が周遊していた。地中海の海岸美に圧倒される。ヴィアベースは土地の観光名物料理。

九月七日(水) マルセイユの旧港から、市内周遊観光トレイン・ツアーでノートルダム寺院へ、昼食は若牛のタルタル(生肉)、夕食は、QED(土肥君がパートナーを務める国際企業)

のメンバーとアウトドアで。Marseille Viuex Porte 泊。

※食事は何を食べても美味しい。さすがフランス料理の本場、市内の高所にあるノートルダム寺院から見た市街地風景は素晴らしい。街全体が整っている。

九月八日(木) レンタカーでエクス・アン・プロバンスへ行き、セザンヌのアトリエを観光、ホテルは個人経営のプチホテル、夕食はガーデンパレスで。Hotel Rotunda 泊。

※エクス・アン・プロバンスは、ローマ時代のローマの植民都市、古い歴史の街、ここでは、セザンヌの絵画の原風景をエンジョイした。街のプラタナス並木と噴水は、まるで絵画の中にいるようであった。

九月九日(金) ローヌ川沿いに北上しリヨンへ、ホテル一階にリヨンロータリークラブの事務所があり、バナーの交換をしたかったが、事務所は工事中で閉鎖されていた。夕食は、エドモンド社(土肥君が顧問を務める国際企業)のメンバーとレストランで。Softer Lyon 泊。

※エクス・アン・プロバンスからリヨンまでは、地道を半分、高速を半分くらい走った。フランスは国の東側の一部を除き、平らな国土が延々と続く。牧場、麦畑、トウモロコシ畑、ぶどう畑など田園風景を楽しむ。フランスは巨大な農業国だと実感した。

九月十日（土） リヨン旧市街地（歴史地区、世界遺産）の古い街並みと、市民市場を観光後、ブルゴーニュワインの集積地ポーヌへ。Hotel Bellevue 泊。

※市内の一番高いにあるサンジャン大司教教会からの市内展望は素晴らしい。美しい街である。市内の市民市場で生牡蠣を食べる。

九月十一日（日） ポーヌ旧市街地観光、施設院（オテル・ディユー）と、ブルゴーニュワインのワイナリー観光の後パリへ。Hotel Albion 泊。

※ポーヌはブルゴーニュ公の都市国家、旧市街地の古い建物に圧倒される。オテル・ディユーは、もとは貧民のための病気の施設所、一四四三年から一九七一年まで病院として使われていた、中庭をはさんで病室、礼拝堂、厨房、調剤室があり、昔の手術器具が展示されていた。

九月十二日（月） パリ十五区のメトロ駅前のホテルから、ノートルダム寺院、凱旋門、などを経て、空港へ、ここでレンタカーを返却。パリ発（出国）二十時、機内ぐっすり泊。

※パリ市内の運転は並の実力ではできない。土肥君の超混雑道路の運転技はすごい。

九月十三日（火） 成田着（入国） 十四時四十分↓成田発十六時四十五分↓伊丹十八時。

※パリ〜成田間も、ANAのビジネスクラスサービスを受けた。これ以上のラッキーはない。
機乗後、第一回目の食事後ぐっすり睡眠、気がつくると利尻島の上空であった。

フランスを縦断し、毎日美味しい本場のフランス料理と各地のワインをいただいた。

世界の主要国を旅行したが、フランスは人間が生きていくための環境が、最高に整っている国ではないかと実感した。

これで最後になるであろう海外旅行を、フランス縦断の旅で締めくくることができ、本当にうれしい。



カナダ・カナディアンロッキー（1996年9月15日）



アメリカ・ホリスター市(1990年6月22日)
第1回姉妹都市親善訪問・歓迎イベント



スコットランド・エジンバラ城（1997年6月13日）



中国・敦煌の莫高窟（2000年5月17日）



中国・万里の長城西端の嘉峪関（2001年8月9日）